

絵画を 言葉にする たの 愉しみ

美術批評家

布施英利

美術批評、ということに取り組んで三十五年ほどになる。

最初の著書『脳の中の美術館』という本を出したのが一九八八年、二十八歳の時だった。その頃も、そしてそれ以後も、世界の美術館に出かけたたくさん絵を見てきた。フランスの洞窟に残された二万年も昔の壁画に心を震わせたこともあった。そういう美術体験を言葉にして、何冊もの本を書いた。

絵画というのは、言葉にできないものを絵にするもので、絵画と向き合った時、人は言葉のない世界と向き合うことになる。だから美術批評のような

絵画を言葉にするのは「どんなものなのか？」と思われる人もいるかもしれない。絵画は、言葉ではない。言葉にならない、と。

しかし、そもそも言葉というのは、言葉にならないものをも言葉にする、ヒトが生み出した一つの能力、媒体だ。絵画や芸術に限らない。人は言葉によって、社会や自然や心を言葉にしてきた。言葉を生んだのは、サルから進化した脳の働きによるが、その「脳の働き」の重要なところは、別の二つのものを「交換」する働きである。それは、何かを結びつける、何かを「同じ」ものとして扱う、ということでもある。例えば、目で見たもの（「光」と、耳で聞いたもの（「音」）を結びつけて、一つの世界を把握することなどだ。ヒトの場合、さらに耳で聞いた声（話し言葉）を、目で見る文字（書き言葉）に変換できる。いや、そもそも声と文字が同じであると認識することが、言語というものである。ともかく、言葉というのは、別の二つの世界を結びつける。ここで話そうとしているのは「絵画を言葉にする」ということだが、そ

う考えると、美術批評という「絵画を言葉にする」行為は、もつともヒト的な行いと考えることもできる。

画家のセザンヌは、テーブルの上のリンゴを見て、リンゴの絵を描いた。そこでは、リンゴと「リンゴの絵」が等価に交換できるものとなる。美術批評というのは、セザンヌがリンゴを見て絵を描いたように、例えば「セザンヌの絵」を見て、それを批評という文章にする作業だ。セザンヌがリンゴを描いたように、批評家は言葉で絵（セザンヌの絵）を描く。

そんな理屈を握てばかりでもない。なので、では具体的に、美術批評という行為は、どんなふうに絵を言葉にするのだろう。例えばセザンヌのリンゴの絵をみて、美味しそうにリンゴだとか、形や色が美しいとか、あるいはそういう静物が置かれているセザンヌのアトリエの部屋について言葉にするやり方もある。もちろん、そんなふうにして絵画を語ってもいいが、それはリンゴやアトリエについて語っているだけで「絵画」について語っているとはいえない。自分が、これまで美術批

評への取り組みによって行ってきたのは、あるいは「絵画を言葉にする」愉しみというのは、そういうことではない。セザンヌの絵画を見て、その絵画そのものが持っている構造・存在感、そういったことを美術批評として「創造」してきた。

例がセザンヌの絵画のことになったので、もう少し、自分のセザンヌ体験あるいは美術館でのセザンヌ批評の具体的なことについて語ってみたい。例えば、シカゴの美術館でセザンヌを見たときのこと。自分はその美術館に行く前に、アメリカ五大湖の湖畔に建つシカゴの水族館に行った。そこでいろんな海洋生物を見て、自然が作り出した生き物の形や色彩に魅了された。「美しい」ということでは、美術なんかよりも自然の方が、もっと多彩で驚きに満ちているのではないか、と思った。それから美術館に行つて、セザンヌの絵を見た。そこには、水族館で見たような自然が生み出した「美しさ」とは別のものがあつた。そのとき、自分が考えていたことを言葉にすれば、セザンヌが描いたのは、画家が見たり

リンゴの形や色や食感や味覚ではなく、そのリンゴを見ている画家の眼差しそのものである、ということを実感したのだ。セザンヌは、まずリンゴを見る。そこからさらに一段階上がつて、そのリンゴを見ている自分の眼差しを、さらに遠くから見る。それを絵画にする、セザンヌの絵が生まれる。絵画とは、画家の目の中、脳の中の世界を描くものだ。それは絵画を描くという行為によって以外に、この世界に存在させることのできない「絵画」という存在に他ならない。自分は、美術館でセザンヌの絵を見ながら、そんなことを考えた（感じた）。そして後日、そんなセザンヌ論を、美術批評の文章として発表した。

自分は、なぜ美術館に行くのか。それは美術が好きで、美術作品を鑑賞する時間に浸りたいからだ。と同時に、自分は美術批評ということも好きで、何か美術批評を書くために美術館に出かけて行って、話のネタを探してくるということもある。美術批評の楽しみは、そこにある。つまり、一つは美術を鑑賞する愉しみ。そしてもう一つは、

美術批評を書く（「絵画を言葉にする」）愉しみだ。美術館に一回行って、二つの愉しみが得られる。

あなたにも、「美術批評（とまで言わなくてもエッセイやブログでもいい）を書く」という愉しみをぜひ、楽しんでいただきたい。

布施英利

美術批評家。1960年、群馬県生まれ。東京藝術大学大学院修了後、東京大学医学部助手などを経て、現在、東京藝術大学教授。主な著書に、『君はレオナルド・ダ・ヴィンチを知っているか』『君はピカソを知っているか』『京都美術鑑賞入門』（ちくまプリマー新書）、『絵筆のいない絵画教室』（紀伊国屋書店）、『「モナリザ」の微笑み』（PHP新書）など。光村図書中学校『国語』2年「君は『最後の晩餐』を知っているか」筆者。

